

さんしゃ Zapping

Vol. 30 No. 1 (通巻 177号)

2015年5月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsume.ac.jp

<http://www.ritsume.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔目 次〕

<新任紹介>

『よい子』で居続けるしんどさ	山岡 雅博	p. 2
ー教員養成で大切にしたいことー		
「発展途上人」着任のご挨拶	田村 和宏	p. 4
着任のご挨拶	富永 京子	p. 7
着任のご挨拶	永島 昂	p. 8

<追悼 加藤直樹先生>

加藤直樹先生を偲んで	黒田 学	p. 10
恩師・加藤直樹先生から頂いた「ことば」	武分 祥子	p. 11

〈新任紹介〉

『よい子』で居続けるしんどさ

－教員養成で大切にしたいこと－



ヤマオカ マサヒロ
山岡 雅博

この度、教職教育推進機構より移籍してまいりました。本学教職課程の専任教員として任用されて6年目となりますが、それまでの33年間は公立中学校の教員として勤めていました。ほとんどの校務分掌を経験しましたが、現職教員時代の後半には主に生活指導や教育相談などを担当していました。特に「不登校」の子どもとたちの出会いが、私が研究職に向かうきっかけとなったと思っています。

20歳代後半、私のクラスに「不登校」の生徒がいました。その当時は、熱血教師よろしく、家庭訪問を毎日おこなっていました。非行などの問題行動を起こす子どもと同じ

ように、1日も早く「更正」させようと思っていたようです。結果としてその生徒を追い詰めてしまい、私が担任をしている間は登校することはありませんでした。その後、多くの不登校生徒やその保護者と関わることで、彼らのしんどさに共感することの大切さを知り、私の教育実践が変化していきました。はじめは、「不登校」を思春期のくぐり方の一つと捉え、学級集団づくりに位置づけて取り組みました。その後、家庭内での居場所づくりや保護者支援の視点から、地域や校内に「不登校の親の会」を立ち上げました。最終的には、様々な状況の不登校の支援を推進するために、校内組織を確立していきました。

私の担当する教職課程の授業でも、「不登校」は必ず扱います。その際、「自分が児童・生徒だったころ、不登校の子どものことをどう思っていたか？」という問いを出します。「共感的に理解していたと思う人は『グー』、良く理解できず批判的に感じていた人は『パー』で、その中間の程度の方は指の数を1から4までで示してください」と指示して、一斉に挙手してもらいます。すると、指を～3本を挙げる人が最も多いのですが、グーや指1本、パーや指4本を挙げる受講生も、

それぞれ 1~2 割はいます。学級担任が不登校指導・対応をクラスでおこなう場合の難しさがここに 있습니다。受講生にはその分布を見渡すように指示し、「皆さんがこのクラスの担任であったら、どう思いますか？」と続けます。このようなクラスにたまたま登校した不登校の子どもは、ここに居心地の悪さを感じてしまうのです。そして、「また、なぜ自分がそう感じているのか、自分自身と向き合ってください」と話し、書ける人はコミュニケーションペーパーに書くことを求めます。「不登校」に批判的な学生の中には、「自分も休みたかったのに、休まずにがんばってきた。不登校する人には怒りさえ覚えた。」と書いてきた学生もいました。青年教師のころの私も同様に感じていました。「失敗しないように、迷惑をかけないように、『よい子』でいた」という内容のコメントもありました。これらのコメントを受け、私は私自身『よい子』を演じ続けていたことに大学の教員になって気付いたという話をします。

「私には忘れられない瞬間があります。小学 3 年生の運動会練習で待機しているとき、膝が痛かった私は、他の子どものようにしゃがむことができず、そばのブランコに腰をかけてしまいました。そのとたん、優しくて大好きだった担任の先生に『山岡君、見そなかったわ』と言われたのです。それ以降、私はがんばって『よい子』で居続けていました。」

「教師は学んできたように教える」とその経験主義的な姿勢が指摘されることがあります。そのため、授業の中でも、その当時の自分自身と出会い直すことを求めます。自らの経験を超えた様々な「教育観」をイメージさせることが必要だと考えるからです。『よ

い子』でいた子どもがいったん不登校をしてしまうと、自己概念が悪化し、不登校状態が維持されやすくなってしまいます。就職活動でつまづいた学生が、その後「引きこもり」になってしまう事も少なくありません。

『よい子』を求める傾向は最近加速されているように感じています。親との関係でいえば、「思春期に反抗がなかった」という学生が少なくないことです。学童期までは、子どもは親に愛される努力をするものですが、親の強い管理下におかれ、思春期になってもその関係を変えにくい場合もあるようです。また、深刻なのは学校でも『よい子』を求められる傾向が強くなっているという点です。厳格な生徒指導が広がっており、「ゼロ・トレランス（寛容性ゼロ）」といわれる生徒指導のシステムの導入が勧められています。

さらに、昨年「地方公務員法」が改正され、2016 年度から全国で人事評価制度を本格実施し（すでに先行実施している自治体もある）、「職務と責任」に応じた給与支給がおこなわれるようになります。つまり、査定昇給制度の導入です。これによって、教員のストレスが増加するとともに、『よい子』が自動的に『よい先生』になっていく可能性も危惧されます。

もともと旧教育基本法（昭和 22 年制定）には第一条（教育の目的）において「国家及び社会の形成者として（の）、…中略…国民の育成」としていましたが、改正教育基本法（平成 18 年制定）には「国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた国民の育成」となり、国家及び社会にとっての『よい子』を求める傾向が強くなったと感じています。また、旧法では教育が権力から独立することを定め

ていましたが、新法では国と地方公共団体が教育をおこなうようになり、教育の中央集権化が強化されました。こういった教育政策は急に始まったわけではなく、1953年、池田・ロバートソン会談において、安全保障体制を確立するにあたって、「教育および広報によって日本に愛国心と自衛のための自発的精神が成長するような空気を助長することに第一の責任をもつものである。」と確認されたのです。教育に対する政治の介入が再び始まった瞬間であると考えられています。私はこの年に生まれ、高度成長の下、「砂をかむような受験戦争」を経験し、がんばり続ける『よい子』だったようです。

新任教員の1年間は条件附採用期間ですが、全国で毎年300名以上が正式採用されずに依願退職していきます。具体的な原因は様々ですが、私は、『よい子』に続き、『よい先生』であることを求められてきたしんどさではないかと思っています。教員養成には、教科指導や生徒指導などで個々の子どもたちに向き合う専門性の育成とともに、この社会でどのように育ってきたか、社会理解を背景にしたメタ認知能力の育成も重要であると思っています。社会の変化の中で成長してきた自らと向き合い、そんな自分自身を受け入れた上でしか、子どもたちのしんどさには寄り添うことができないと考えています。

「発展途上人」着任のご挨拶



タムラ カズヒロ
田村 和宏

スタディ」と「肢体不自由教育」「社会福祉援助技術」「障害者福祉論」を担当します。よろしくお願いいたします。

私はかれこれ30年ほど前に大学を卒業し、お隣の滋賀県にある「びわこ学園」という重症心身障害の人たちが生活する入所施設に就職をしました。寝たきりで知的にも最重度の障害がある人たち。なかには人工呼吸器で呼吸をすることを手伝ってもらいながら、それでも“私”なりの毎日を生きている人たちがいました。まずは入所施設の指導員として働きました。毎日、養護学校の先生たちとともに授業のふり返りや授業計画の議論をしながらいっしょに教育実践をし、養護学校と

2015年4月より、産業社会学部人間福祉専攻でお世話になっている田村和宏(たむらかずひろ)です。「基礎演習」「プロジェクト

合同で実践研究会などをしながら目の前の子どもたちから学ぶことの喜びを感じていました。毎日うたって飛び跳ねていました。その後数年が経過し今度は入所施設を離れ、重症児者が通う施設づくりや障害児者と家族の相談支援の仕事や、いくつかの地域支援事業がある複合施設の所長にいたるまで、まさに障害福祉の激動の時代の変化の中で、社会や地域から要請される事業や施設をびわこ学園として立ち上げていく、その仕事をしてきました。社会の価値観の変化を障害福祉の制度変化を実感しつつも、常に発達保障の理念と理論を脇に抱えながら、変革していくものと変えてはならないものを毎年の実践をしっかりと集団討議し総括して、成果と課題を明確にしてそれを核心にしがら積み上げ、または次に展開してきたつもりです。机上の空論ではなく、実践研究を基盤にしながら、実践による財産を一般化すること、社会化することによって、重症児とその生活(の支援)をゆたかにしていきたいという思いでした。

一方で、より重症児者支援の質を高め現実の暮らしぶりを変えたくて、「全国障害者問題研究会」や「障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会」「福祉保育労働組合」の滋賀県での研究運動や労働運動にも関わりました。障害のある人たちのより日常の生きる姿を捉まえつつ、人間として当たり前保障されるべき生きることそのものが、保障とはまったく正反対に動いている社会の体制と現実に、自らが突き動かされて研究運動・労働運動にも没頭してきました。

また、人間らしく生きるということの内実を深くみつめていきたいと、天津市にある人間発達研究所というところで1985年から運

営委員もしています。そこでは、田中昌人先生や加藤直樹先生や荒木穂積先生などから、発達保障論についてたくさんのことを学びました。特に、人間発達ということについて、権利性からとらえる視点に加え、発達とは自己変革・自己実現していく過程だという個人の発達理論ことについても詳しく学ばせていただきました。今もまだ、その発達を学ぶ途上にいる「発展途上人」だと思っています。発達が無差別・平等のものであり、そのことを個人の系、集団の系、社会体制の発展からとらえて、しかもそれらを統一してとらえながら実践の力にすることが重要だということは、私のこれからの研究方向や、いま実践現場を励ましていく研究者としての基本的立ち位置です。

私自身、長く実践現場でもがいてきたからこそ感じるいまの実践現場の課題は、それは人間らしく輝いていく実践を創り出す、輝かせる、誇らしくするエネルギーのパワー不足です。“元気がない”とってしまえばそれまでですが、それでも保育や教育や療育や介護労働や生活支援などにおいて、目の前の人としっかり向き合いながら実践を展開はされているのに、そこで喜びや楽しみが膨らんでいかない、つながらない、束ねがない状態です。そこには確かに賃金が安いということもありますが、それ以上に教育や福祉労働者が実践することのなかで、より人間らしく自らを発達させていく現場となりきれない、そんな大きな困難や深刻さがあるように思います。いまの社会のあり方がそうさせています。

私自身は、いまのこのような状況にある実践現場において、実践を創っていく主体であ

る教職員が、実践をすすめることによって自らをも自己変革させていくようにしたい、そのための接着剤や懐中電灯やガイドブックにもなっていきたいと考えています。またそんなパワーのある若い実践者を育てていきたいと思っています。そういう意味で私は、研究と実践の有機的結合をすすめ、実践の主体者や実践の推進者が元気になってその元気をつなげていくような研究者であり続けたいし、人の生の営みや自己変革にしみいるような研究をしていきたいと思っています。

研究については、今のところそれぞれではないかんじなのですが、近い目標としては「滋賀県の重症児者の生活実態と支援システムについて」や『夜明け前の子どもたち』から50年を経て、「成人期障害者支援における実践研究の方法論」などをまとめたと考えているところです。また重症児者コーディネーターの養成に関わるモデル事業について、他の大学の先生とともにいくつかの地域でモデル展開していきたいとも考えているところです。やりたいことがたくさんあります。でも、何はともあれ立命館大学の日常に慣れることと、そしてまず教員として、教育者として、社会福祉の実践現場にすすんでくれるような学生を多く導くことが、新米の私のまずは力を入れる仕事かと思っています。

体型や風貌だけは、先日亡くなられた立命館大学名誉教授の加藤直樹先生に似ているといわれ続けてきました。そういうこともあり、私は加藤先生の背中を見ながら、加藤先生にあこがれ、加藤先生のようになりたいと歩いてきました。「立命館に行くことが決まりました」と昨年末に病床に報告とお

見舞いをした時に、「よかった、よかった、よかった、よかった」と何度も何度も言われて、たいへん喜んでいただいた笑顔の加藤先生が脳裏に浮かんできます。加藤先生に「似ているね」という形容から、中身も含めて「近づいてきたね」といわれるような研究者・組織者になっていきたいと思っています。そういう私の「大人の発達保障」をこれからここ立命館大学で実践していこうと思っています。

ですが、まだまだ研究者としても「発達途上人」な私です。わからないことも多く、また視野も狭い未熟な研究者です。多くの先生方に教えをこう場面もたくさんでくださるかと思います。その折には、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

Zapping 原稿募集



研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

原稿は skyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付してくださいませようよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

トミナガ キョウコ
富永 京子

4月より現代社会専攻でお世話になっております、富永京子です。あたたかくお迎え頂いたことを、心より感謝申し上げます。

専門は社会運動論・国際社会学で、「グローバル・フォーカス」指定履修科目、大学院「グローバルプロジェクト」関連科目を担当いたしております。個人研究室は331・332号室ですが、まだお客様が誰もいらっしゃらず寂しいので、国際調査研究センター（産業社会学部事務室内）に詰めていることも多くあります。

プロフィールですが、1986年に北海道札幌市にて生まれ、2009年に北海道大学経済学部経営学科を卒業し、2011年に東京大学大学院人文社会系研究科修士課程を修了、昨年度に同研究科博士課程を修了いたしました。2012年から昨年度まで日本学術振興会特別研究員（DC2, PD）、統計数理研究所特別研究員として活動しておりました。恥ずかしながら、教歴はゲストレクチャーと集中講義を除いてはほとんどありません。元来ぼんやりした人間で、研究機関にも学生・研究員として所属した経験しかないため、「働く呼吸」がいまいちわかっておらず、皆様にご迷惑をおかけすることもあるかと思えます。早めに慣れるよう努めますので、どうかよろしくお願いたします。

私個人の研究に関して、これまでは先進8ヶ国で毎年行われる国際閣僚会議「G8（G7



サミット」に対する抗議行動を調査してきました。ただ、私が惹かれたのは反グローバリズム運動や国際政治と市民活動の関連性というよりも、むしろ「左翼」と自称する人々の生態でした。年賀状に「平成」と書いて「天皇制を支持するのか」と怒られ、スターバックスコーヒーを飲んで「グローバルな格差増大に加担するのか」と叱られつつも、懐の深い彼らに甘えてレフティ・ライフを楽しんできました。そのうち、彼らを「左翼」としているものはこうした日常の一つ一つの振る舞いの積み重ねなのではないかと感じ、「社会運動のサブカルチャー的側面」というテーマで博士論文を執筆いたしました。

今後の研究ですが、本年度から来年度中をめどに、博士論文の日本語版・英語版の出版につとめたいと思います。また、本年度から若手研究（B）の助成によりプロジェクト「グローバルな相互理解の場としての国際政治

活動プロセスに関する実証研究」を行う予定です。社会運動を、活動家が集合して行う「ツーリズム」の場として捉え、彼らの衣食住とコミュニケーションの過程を見ることによって、政治的相互理解の場としての社会運動を探求していきたいと思えます。理解できなかった彼らに対する来年の G8 (G7) サミットは日本開催ということで、また調査に出かけられればと考えています。

また、国際的な学術貢献も今後したいことの一つです。博士課程進学以降、「アカデミック・バックパッカー」などと自称して、国内外いろいろな地域に立ち寄りつつ、会議やワークショップでの報告・受講・レクチャー活動を行ってきました。共同研究として、イ

ンターネット上の社会運動に関する国際比較研究 (Study of the Internet in Asia-Pacific) と東アジアの社会運動比較プロジェクト (East Asian Civil Society) などに参加しています。自分自身、日本と海外 (特に欧州・東アジア) の研究者の方々に育てていただいたという自覚を強く持っています。比較的研究資源の潤沢な日本に在籍し、欧米では比較的希少な「日本発の日本人社会学者」として、国際的に何を発信し、貢献できるかということは強くこだわってきた部分でもあります。産業社会学部に対してもこうした経験をもって貢献できればと考えていますので、どうぞよろしくお願い致します。

着任のご挨拶



この度、産業社会学部現代社会専攻に着任いたしました永島昂(ながしま たかし)と申します。「日本経済論」、「現代経済論」、そ

ナガシマ タカシ
永島 昂

して小集団科目を担当させて頂くことになりました。よろしくお願い申し上げます。

私は 2001 年に中央大学に入学して以来、大学院の修士課程・博士課程、そして任期制助教も含めて計 14 年間も中央大学で過ごしてきました。生まれも神奈川県なので、根っからの関東の人間なわけですが、3 月末に土地勘の全く無い京都に越してきて、右も左もわからない状態がしばらく続きましたが、ようやく京都の町の雰囲気にも慣れてきました。また、長い間、同じ大学で過ごしてきましたので、新たな大学に来ると、諸々のシステムが全く異なるので戸惑うことばかりで

したが、共研の職員さん、学部事務の職員さんたちが何も知らない私に手取り足取り教えてくださりました。ありがとうございます。また、現代社会専攻長の櫻井先生をはじめとして、多くの先生方が私に気をかけて下さり、そして快く迎えてくださり、ありがとうございます。この場を借りて、感謝を申し上げます。

さて、私の専門分野は産業論になりますが、現在のコアな研究テーマは戦後日本鋳物産業の歴史的展開を、中小企業の技術発展に注目しながら、歴史的に実証的に明らかにするというものです。鋳物屋さんの研究をしている訳ですが、産業論の分野でもかなりマニアックな研究対象として、社会科学的な研究は数えるほどしかありません。大学院時代にお世話になった先生からも「この分野はおそらく、今後も含めて、あなたしかやらないんだから、頑張りなさい」と、妙な激励を頂いたほどです。研究としてはあまり注目されてこなかった産業なのですが、社会的にはそれなりに認知されております。映画「キューポラのある街」（1962年・浦山桐朗監督）をご覧になった方はいらっしゃるのではないのでしょうか。女優の吉永小百合の主演映画としても有名なのですが、その舞台となった埼玉県川口市は、日本の代表的な鋳物産地なのです。私がこの産業と出会ったきっかけもこの映画でした。

映画で描かれている1960年代の川口鋳物産地は最盛期を迎えつつあり、狭い市内のなかに500軒、600軒もの鋳物屋があったと言われていますが、今では50軒あるかないかという状態で、現在の「鋳物の町川口」は当時と比べると大変見劣りします。いまでは鋳

物屋の工場跡地に高層マンションが建ち、「高層マンションの町川口」なのではと揶揄したくなりますが、いまでも川口では鋳物づくりが脈々と続けられています。

初めて川口鋳物メーカーを訪れた時の第一印象は、「ボロい」「泥臭い」でした。造型工が手作業で、砂を形づくって、鋳型をつくる。ドロドロと溶けた灼熱の溶湯を鋳型に流し込む。こうして鋳物が作られるわけですが、「いったいこの鋳物は何に使われるのですか？」と質問すると、その「泥臭い」くて、一見すると「ローテク」な世界から生み出された鋳物は、「ハイテク」工業製品であるスマートフォンの半導体製造装置の土台になるのです。

そうした世界とは無縁に暮らしてきた私は、一種のカルチャーショックを受け、彼らのもつ「泥臭さ」と技術的な先端性をどのように理解したら良いか、もっと知りたくなり、ここから私の鋳物屋研究がスタートしました。詳しくは、産業社会学部共同研究会で研究紹介をいたしますので、もしご興味がありましたら、ご笑覧ください。

このように狭い世界をフィールドにして実態調査を重ね、過去の一次資料を収集し研究してきた私ですが、今度は、一挙に世界を広げ、日本経済というマクロな世界を教えることになりました。学びつつ教える日々が続くこととなりますが、これも研究者としてのステップアップなのだと思え、精一杯頑張りたいと思います。ご迷惑をお掛けすることも多々あるかと思いますが、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。以上、簡単ですが、着任の挨拶と自己紹介にかえさせて頂きます。

〈追悼 加藤直樹先生〉

加藤直樹先生を偲んで

黒田 学



故 加藤直樹先生
(1月18日逝去、享年73歳)

加藤先生がお亡くなりになって、数ヶ月経つが未だに気持ちの整理がつかずにいる。

先生が私の論文指導を引き受けて下さったのは、1991年、M2の秋のことである。学部生時代から指導して頂いた遠藤晃先生が教授会中に倒れられ、昏睡状態が続いたことから、修士論文の指導教員をお願いしご快諾頂いた。引き続き博士後期課程でもご指導頂くことになった。

加藤先生にお目にかかる以前、御著書をいくつか読ませてもらっていた。一番はじめに読んだのは、『人づくりの労働論—青年期障害者の発達』（二宮厚美氏らとの共著、清風

堂書店出版部、1986年刊）で、加藤先生が立命館大学に着任される前に執筆されたものだ。「成人期障害者の発達論の創造に向けて」と題された章を担当され、成人期障害者の人格発達の問題を検討されていた。ただし、その問題は障害者に限定されるものではなく、青年・国民全体の人格発達の問題として述べられていた。青年期は自分で自分を立ちなおさせるということが、成人の発達を考える際にとっても大切であると提起され、自分で自分のことがわかる自己認識、未来に対する見通しと認識した課題への実行力という目的意識性、自己を支える集団という集団連帯性を条件とした人格発達論を展開されていた。このような加藤先生の人間発達研究は、「社会的人間発達」をキー概念として、その後全面的に展開された。

1987年に学部を卒業し、就職先で悶々としていた20歳代半ば、青年期から抜けきれなかった私にとって、加藤先生の発達論は非常に新鮮な提起であった。個人の発達を集団や社会との関わりで捉えること、その視点を持って地域づくりや地域での子育て、発達保障を考えてみたいと思うきっかけとなった。しかしまだその時は、加藤先生は「本の世界の人」であり、その後御指導頂けることになろうとは夢にも思わなかった。

加藤先生の指導は、ゼミだけでなく、食事

や飲み会、リラックスした場での語り合いが大きなウエイトを占めていた。このように述べると論文指導をしっかりとしてもらえなかったのかと思われる向きがあるかもしれないが、真逆である。たしかに今のように、論文指導にあたって可視化された年次計画をもっておられたとは思えないが、私自身の課題、研究だけでなく私の生活を含め、まさに「丸ごと」の私を捉え、様々な角度から語って頂いていたのだと思う。「自分で自分を立ちなおさせる」という視点から、私の研究者としての構えや一つ一つの研究、論文執筆に際して、自分で自分の課題がわかるように目的意識を持たせるように迫られていたのだと今になって気づく。私の弱点や課題のすべてを語らず、その都度自覚させようと根気強く働きかけるという教育実践を教室内外で行っておられたのだ。

加藤先生が逝去される少し前の昨年 11 月、ある研究会でお話を伺う機会があった。先生は、集団の発達、社会的人間発達に関する報告を簡潔かつ明晰に語られた。その内容をこ

こで再現することは避けたいが、先生は現代社会の排他的な有り様、人間の尊厳を傷つける集団や社会の有り様に対して、理論的かつ実践的な課題を私たち参加者に託されたように思う。研究や実践を担う一人ひとりが自覚的に自らの課題に取り組み、課題解決に向けた将来への見通しをもち、研究者集団や実践家集団の連帯性を堅持しながら歩むべき道を静かに語られたのだ。

それが、まさか「ラストメッセージ」になるうとは思ってもよらなかったが、加藤先生はまさに研究を地で行く実践を常に心がけ、最後の最後までその姿を真摯に示して下さったのだろう。加藤先生から頂いたバトンをどのように引き継ぎ、受け渡していけばよいのか、その見通しは正直まだ明確ではないが、まずは一歩ずつ歩いていくことが先生への姿に応えることだと思う。

加藤直樹先生、ご冥福をお祈りしますとともに、心からの感謝を申し上げます。長い間本当にありがとうございました。

恩師・加藤直樹先生から頂いた「ことば」

飯田女子短期大学 武分 祥子

私は立命館大学大学院社会学研究科において 5 年間、加藤直樹先生のゼミでご指導を頂き、その後も様々なかたちでご助言を頂きました。加藤先生と初めてお会いしたのは、大学院入学を目指そうと決意した 1999 年の初夏のことで、それから約 15 年間何かと教

えを受けてきたことになります。今回、加藤先生の教えの中で頂いた「ことば」を思い出し、改めてその「ことば」の意味を考えたいと思います。

初めてお会いしたその時、「研究者を目指すなら僕と対等です。敵です。容赦しません」

という「ことば」を頂いたことで、これから大学院を目指す＝研究者を目指すという決意が固まりました。

院生時代には、ゼミや交流会、夏の合宿等で、温かく、懐深く、その一方で厳しく指導をして頂きました。そして、学生にも院生にもどのような人に対しても常に同じように丁寧に接する姿に感動し、加藤先生のようになりたいと思いました。研究が思うように進まない時には、「僕は天才だけど、あなたは凡人だから一生懸命努力しなさい」「そんなにすぐ文章は書けません。僕が1行書くのにどんなに苦労しているか知っていますか」と激励して頂きました。また本当によく食事に連れて行って頂き、手料理を振舞って頂いたのですが、「僕が年金生活になったら、面倒をみてもらいますから大丈夫です」といつも笑ってご馳走してくださいました。研究指導においては、「あなたは実践を積んできた人だから、書けないわけがありません」「他流試合（学会発表）をどんどんして、揉まれてきなさい」「研究のフィールドも院生の立場でお願いして、自分の力で研究を進めていきなさい」「いろんな先生から学んできなさい」とおっしゃいました。そのおかげで積極的にフィールド調査に出かけ、多くの人々と出会い、助けて頂く中で、人とのつながりの大切さを知ることが出来ました。

大学教員を目指して就職活動を始めた時には、「あなたは大学教員に向いています。おなりなさい」と何度も推薦状を作成してくださいました。博士前期課程修了で就職を考え相談した時には、「今就職しても、あなたにとって意味はありませんよ」「ちゃんと博士をとってから就職しなさい」と将来を見据

えた助言をしてくださいました。今思えば、加藤先生のおっしゃる通り、博士課程を修了して就職したことは正しい判断でした。私の就職が決まった時には、加藤先生は飯田市まで出向いてくださいました。職場の様子を確認して下さった後、「学生よりもよい車に乗りなさい」と笑いながら言ってくださいました。その後も「メールでよいから様子を知らせてください」「年に一度でよいから会いましょう」と何かと気づかせてくださいました。お会いした時には「まだ教授にならないのですか」と叱咤激励して頂きました。

昨年12月の入院中には、ご自身がしんどい状態でありながらも「すごい人ですね。立派やなあ」と私を褒めてくださり、「あなたは〇〇〇〇になりなさい」と新たな目標を与えてくださいました。

これまで加藤先生から頂いた数々の「ことば」は、随所随所で私の支えとなってきました。そして私自身が加藤先生から発達保障に基づいた教育・指導を最大限に受けながら発達し、現在の私となれたことを実感しています。加藤先生にして頂いたことは必ず、自分がかかわった学生にしたいと思っています。

「学生は大学にとって大切な商品です。大切な商品は絶対に傷つけてはいけません」「今僕がしていることを、将来あなたの学生にしてあげなさい」という加藤先生の「ことば」を実行に移しています。加藤先生が病床で与えてくださった「あなたは〇〇〇〇になりなさい」という「ことば」は今の私の目標であり、加藤先生との最後の約束です。